

曹植の神仙樂府について

——先行作品との異同を中心に——

矢 田 博 士

- (一) 序
- (二) 神仙樂府の性格
- (三) 神仙に對する曹植の基本的態度
- (四) 曹植の神仙樂府の意圖するもの
- (五) 屈原からの影響
- (六) 神仙樂府における安全辯の作用
- (七) 結語

(一) 序

「其源出於國風」——これは梁の鍾嶸が『詩品』上品で、曹植の詩に對して下した評價である。以來、曹植は『詩經』國風の流れを純粹に繼承した詩人としてとらえられている。しかし、彼の作品には、一方の『楚辭』(屈原)の影響をふ

曹植の神仙樂府について (矢田)

んだんに受けていると思われる作品も數多くみられる。⁽¹⁾特に神仙を詠じた樂府(以下、神仙樂府と稱す)に、その傾向が著しい。

現存の關連作品を主題の面から見た場合、曹植は、神仙に關する樂府を十一首⁽²⁾殘している。「升天行・二首」「仙人篇」「遊仙」「五遊詠」「平陵東」「苦思行」「遠遊篇」「桂之樹行」「飛龍篇」「驅車篇」がそれである。曹植の樂府作品の總數が四十一首⁽³⁾であることから、實にその四分の一を神仙樂府が占めているわけである。しかし、これまでの樂府研究においては、一般に神仙樂府に對する評價が低かったためか、曹植の神仙樂府について、その數量的な比重の割には、ほとんど系統的な考察⁽⁴⁾が加えられていなかった。

本稿では、こうした曹植の神仙樂府に焦點をあて、主とし

て先行作品との異同という観点から、神仙樂府における曹植の獨自性を明らかにすることを試みたい。

(二) 神仙樂府の性格

神仙樂府は、貴族などの宴會で歌われた祝頌歌辭として、漢代に初めて登場した。そして、それは主として宴會に招かれた賓客が、その返禮として主人の延命長壽を祈願するために作られた。この點に關しては、清の陳祚明が、最も端的に言及していると思われるので、その説を擧げておく。

合樂於堂者、皆富貴人也。爲詞以進者、皆以祝頌也。

富貴人復何可祝。所不知者壽耳。故多言神仙。爲詞以進者、大抵其客。此客承恩深、故其詞如此。

(『采菽堂古詩選』卷二、善哉行)

その歌辭が一般にどのような形態をとっていたかと言え、まず、長壽の象徴として、神仙界の様子を何らかのストーリー性を交えながら描出し、それを承ける形で、長壽を祝頌する言葉述べて、歌辭全體をしめくくる、というものである。具體例として、「長歌行」其二を擧げてみる。

- | | |
|----------|--------------|
| 1 仙人騎白鹿 | 仙人 白鹿に騎る |
| 2 髮短耳何長 | 髮は短かく耳は何ぞ長き |
| 3 導我上太華 | 我を導きて太華に上り |
| 4 攬芝獲赤幢 | 芝を攬りて 赤幢を獲る |
| 5 來到主人門 | 來りて主人の門に到り |
| 6 奉藥一玉箱 | 藥を奉ること一玉箱 |
| 7 主人服此藥 | 主人 此の藥を服すれば |
| 8 身體日康彊 | 身體 日々康彊ならん |
| 9 髮白復更黑 | 髮の白きも復た黒に更はり |
| 10 延年壽命長 | 延年して壽命長からん |

宴會で詩を賦し、長壽を祈願する習慣は、魏の時代においても、ごく一般的に行われていたらしい。吳質が曹丕あてに出した手紙、「答魏太子牋」にも、以下のように見える。

昔侍左右、厠坐衆賢。出有微行之遊、入有管絃之權。置酒樂飲、賦詩稱壽。

(傍點矢田・以下同じ)

吳質がこのとき曹丕の長壽を祈願して作った詩は、今日で

は見ることができないが、おそらく漢代の神仙樂府と同じような形態で歌われたものと思われる。そのことは、次に擧げる曹操の「氣出倡」其三の歌辭の形態を見れば、いっそう確かなものとなろう。

- 1 遊君山
君山に遊び
甚だ眞たり
- 2 甚爲眞。
確碗碎砢として
- 3 確碗碎砢
爾 自ら神たり
- 4 爾自爲神。」「
乃ち王母の臺に到り
- 5 乃到王母臺
金階 玉もて堂と爲す
- 6 金階玉爲堂。
芝草 殿傍に生ず
- 7 芝草生殿傍。
東西の廂
- 8 東西廂。
客は堂に滿つ
- 9 客滿堂。
主人 當に行觴すべし
- 10 主人當行觴。
「坐者の長壽 遽何ぞ央きん
- 11 坐者長壽遽何央。
長樂 甫めて始まり
- 12 長樂甫始。
孫子に宜し
- 13 宜孫子。
常に願はくは 主人増年して
- 14 常願主人増年
與天相守。」「
天と相守らんことを

曹植の神仙樂府について(矢田)

歌辭の主題は、最終句に見える延命長壽の祈願にあることは明白である。が、この場合も、歌辭の前半部分で、神仙界の様子が長壽を象徴するものとして描かれており、歌辭の形態が、先に擧げた「長歌行」其二と基本的に同じであることが、確認されよう。

このように、神仙樂府は、漢魏においては、宴會用の祝頌歌辭として、専ら延命長壽を祈願するために作られた、と考えられる。

ところで、これまでの樂府研究において、こうした神仙樂府に對する評價は、一般に低いものであった。その原因としては、主題が稱壽という點に限定されていたため、歌辭の内容も自ずと制約され、マンネリズムに陥りやすかったこと、また、もともと祝頌歌辭として作られたものであったため、樂府詩の性格として最も重視されるはずの諷諫性といった要素を、歌辭の中に見出すことが、極めて困難であったこと、などが擧げられよう。また、曹植の作品に限っても、一般に神仙樂府への評價が他の作品に比べて低いのは、主としてこうした神仙樂府ゆえの一般的なイメージが、先入觀として働いていたことが考えられよう。

(三) 神仙に對する曹植の基本的態度

曹植の神仙樂府が、その樂府作品の總數の四分の一を占めることは、すでに述べた通りである。その數量的な比重から判斷すれば、曹植は神仙樂府の創作に關して、かなり意欲的にとりこんでいたことが考えられよう。

しかし實際には、曹植自身、神仙思想に對しては、甚だ懷疑的であつたらしい。その態度は彼の「辨道論」の中に、はっきりと示されている。

夫神仙之書、道家之言、乃云「傳說上爲辰尾宿。歲星降下爲東方朔。淮南王安誅於淮南、而謂之獲道輕舉。鈞戔死於雲陽、而謂之尸逝松空。」其爲虛妄甚矣哉。

………中略………

豈復欲觀神仙於瀛洲、求安期於邊海、釋金輅而顧雲興、棄文驥而求飛龍哉。自家王與太子及余兄弟、咸以爲調笑、不信之矣。

これによると、神仙思想を信じていなかったのは、曹植だけではなく、父の曹操をはじめ、兄の曹丕及びその他の兄弟

においても、そうであつたらしい。というよりは、曹植の神仙に對する懷疑的な態度は、乱世にあって徹底的に功利主義・現實主義の立場をとつた父曹操の影響の下に、育成されたものであつたと考えるべきであらう。

また、曹植のそのような態度は、「秋思賦」及び「贈白馬王彪」其七等の作品にも見ることができよう。

松喬難慕兮誰能仙

長短命也兮獨何愆

松・喬 慕ひ難し
誰か能く仙たらん
長短 命なるかな
獨り何ぞ愆はん

(秋思賦)

苦辛何慮思

天命信可疑

虛無求列仙

松子久吾欺

苦辛して 何をか慮思する

天命 信に疑ふべし

虚無なるかな 列仙を求む

松子 久しく吾を欺く

(贈白馬王彪) 其七)

「贈白馬王彪」は、黄初四年(二三三年)、すなわち曹植の三十二歳の時の作品である。この點から見れば、曹植はこの

時期においても、依然として神仙不信の態度をとっていたということが確認されよう。曹植のこうした態度は、基本的に、終生一貫したものであったと考えてよいであろう。

ところで、曹植の同時期の署名作家で、神仙樂府を現在に残しているのは、曹植以外では、曹操と曹丕の二人だけである。曹操の神仙樂府としては、「陌上桑」「氣出倡・三首」「秋胡行・二首」「精列」と、計七首が挙げられるが、曹丕のものとしては、「折楊柳行」の一首が挙げられるのみである。それに對して、曹植の神仙樂府は十一首を數える。その數の多さは、曹操・曹丕の作品數と比較すれば、歴然としていよう。

すでに述べたように、曹操・曹丕もまた、神仙に對しては懷疑的であった。彼らはそうした態度を、神仙樂府自體においても、はっきりと表明している。特に曹丕の場合は、その唯一の神仙樂府「折楊柳行」において、そうである。曹丕の「折楊柳行」は全部で二十四句から成る。前半十二句の内容は、仙界に登り、二人の仙童から仙藥をうけとり、仙術を得る、といったものである。⁽¹³⁾ これだけを見れば、從來の神仙樂

曹植の神仙樂府について(矢田)

府と何ら變わるころはない。ところが、彼はさらに換韻した後半十二句で、以下のように、神仙思想に對する厳しい批判を行なっている。

- | | |
|----------|----------------|
| 13 彭祖稱七百 | 彭祖 七百と稱するも |
| 14 悠悠安可原 | 悠悠たり 安くにか原ぬべけん |
| 15 老聃適西戎 | 老聃 西戎に適くも |
| 16 于今竟不還 | 今に于て 竟に還らず |
| 17 王喬假虛辭 | 王喬 虛辭を假り |
| 18 赤松垂空言 | 赤松 空言を垂る |
| 19 達人識眞僞 | 達人は眞僞を識り |
| 20 愚夫好妄傳 | 愚夫は妄傳を好む |
| 21 追念往古事 | 往古の事を追念すれば |
| 22 憤憤千萬端 | 憤憤たること千萬端 |
| 23 百家多迂怪 | 百家 迂怪多し |
| 24 聖道我所觀 | 聖道のみ我の觀る所ぞ |

曹操もまた、同様であった。一方では「氣出倡・三首」「秋胡行」其一等、ひたすら神仙を追い求める作品を作りながら、その一方では、「精列」「思想崑崙居 見欺於迂怪」

や、「秋胡行」其二（「存亡有命 慮之爲蚩」）などで、神仙思想を厳しく批判している。

このように、曹操と曹丕については、神仙に對する自己の立場を、神仙樂府それ自體の中で、はっきりと表示している。

一方、曹植の場合は、「論」や「賦」や「徒詩」などのジャンルでは神仙に對する否定的な態度を表示しているのであるが、神仙樂府自體においては、そのような態度をいささかも見せてはいない。そればかりではなく、現に十一首を數える作品を残すなど、神仙樂府の創作ということには、むしろ積極的にとりくんでいたことを想像させる。

曹操・曹丕と曹植との間に見られるこのような明確な差異は、いったい何を意味しているのであろうか。

(四) 曹植の神仙樂府の意圖するもの

神仙樂府が、延命長壽の祈願を主題とすること、またその歌辭が一般に、まず、長壽の象徴として神仙界の様子を描出し、最後に延命長壽を祈願する言葉で歌辭をしめくくる、といった形態をとることは、すでに述べた通りである。曹植の神仙樂府についても、基本的には同じことが言える。

飛龍篇

- | | |
|---------|-------------------------------|
| 1 晨遊泰山 | 晨 <small>あした</small> に泰山に遊ぶ |
| 2 雲霧窈窕 | 雲霧 窈窕たり |
| 3 忽逢二童 | 忽ち二童に逢ふ |
| 4 顔色鮮好 | 顔色 鮮好たり |
| 5 乘彼白鹿 | 彼の白鹿に乗り |
| 6 手翳芝草 | 手には芝草を翳 <small>かき</small> す |
| 7 我知真人 | 我 真人なりと知り |
| 8 長跪問道 | 長跪して道を問ふ |
| 9 西登玉臺 | 西のかた玉臺に登れば |
| 10 金樓複道 | 金樓と複道あり |
| 11 授我仙藥 | 我に仙藥を授く |
| 12 神皇所造 | 神皇の造る所なり |
| 13 教我服食 | 我をして服食せしむれば |
| 14 還精補腦 | 精を還 <small>かへ</small> らし 腦を補ふ |
| 15 壽同金石 | 壽は金石と同じく |
| 16 永世難老 | 永世 老い難し |

全部で十六句から成るこの作品の主題は、明らかに最後の二句、つまり長壽達成を祈願することにある。この作品では

十四句にもわたって神仙界での場面が展開されている。しかしそれは、あくまでもその主題である長壽を導くものとして、象徴的に描かれているにすぎない。しかも、神仙界における場面の展開は、先に挙げた「長歌行」其二のそれとほとんど變わらない⁽¹⁹⁾。曹植の神仙樂府も、その目的は基本的に延命長壽の達成を祈願することにあつたと考えられよう。

しかし、曹植の神仙樂府の中には、延命長壽の祈願といった従來の形態をとりながら、現實世界に對する自己の不滿を、それとなく訴えかけていると思われる作品、つまり、遊仙・求仙の詩句に何らかの寄託性を含んだと思われる作品が、確かに存在する。「五遊詠」「仙人篇」「遠遊篇」等の作品がそれである。

曹植の不滿は、どのような形で表示されているのであろうか。ここではまず、これらの作品を全部列挙してみるのが有効であろう。

五遊詠

1 九州不足歩、

九州 歩むに足らず

2 願得凌雲翔

願はくは 凌雲の翔を得ん

曹植の神仙樂府について (矢田)

- | | |
|----------|--------------|
| 3 逍遙八紘外 | 逍遙す 八紘の外 |
| 4 遊目歷遐荒 | 遊目して遐荒を歴ん |
| 5 披我丹霞衣 | 我が丹霞の衣を披り |
| 6 襲我素霓裳 | 我が素霓の裳を襲ぬ |
| 7 華蓋芬晻藹 | 華蓋 芬として晻藹たり |
| 8 六龍仰天驥 | 六龍 天を仰ぎて驥る |
| 9 曜靈未移景 | 曜靈 未だ景を移さざるに |
| 10 倏忽造昊蒼 | 倏忽として昊蒼に進る |
| 11 閭闔啓丹扉 | 閭闔 丹扉を啓き |
| 12 雙闕曜朱光 | 雙闕 朱光を曜かす |
| 13 徘徊文昌殿 | 徘徊す 文昌殿 |
| 14 登陟太微堂 | 登陟す 太微堂 |
| 15 上帝休西楯 | 上帝 西楯に休み |
| 16 羣后集東廂 | 羣后 東廂に集ふ |
| 17 帶我瓊瑤佩 | 我が瓊瑤の佩を帯び |
| 18 漱我沆瀣漿 | 我が沆瀣の漿を漱ぐ |
| 19 踟躕玩靈芝 | 踟躕して靈芝を玩び |
| 20 徙倚弄華芳 | 徙倚して華芳を弄ぶ |
| 21 王子奉仙藥 | 王子 仙藥を奉り |
| 22 羨門進奇方 | 羨門 奇方を進む |

23 服食享遐紀
 24 延壽保無疆
 服食すれば遐紀を享け
 延壽して無疆を保たん

仙人篇

1 仙人攬六著
 2 對博太山隅
 3 湘娥拊琴瑟
 4 秦女吹笙竽
 5 玉樽盈桂酒
 6 河伯獻神魚
 7 四海一何局
 8 九州安所如
 9 韓終與王喬
 10 要我於天衢
 11 萬里不足步
 12 輕舉凌太虛
 13 飛騰踰景雲
 14 高風吹我軀
 15 廻駕觀紫薇
 16 與帝合靈符
 仙人 六著を攬り
 對博す 太山の隅
 湘娥 琴瑟を拊し
 秦女 笙竽を吹く
 玉樽 桂酒を盈たし
 河伯 神魚を獻ず
 四海 一に何ぞ局なる
 九州 安くにか如く所ぞ
 韓終と王喬と
 我を天衢に要つ
 萬里 歩むに足らず
 輕舉して太虛を凌ぐ
 飛騰して景雲を踰え
 高風 我が軀を吹く
 駕を廻らして紫薇を觀み
 帝と靈符を合はす

17 閭闔正嵯峨
 18 雙闕萬丈餘
 19 玉樹扶道生
 20 白虎夾門樞
 21 驅風遊四海
 22 東過王母廬
 23 俯觀五嶽閒
 24 人生如寄居
 25 潛光養羽翼
 26 進趨且徐徐
 27 不見軒轅氏
 28 乘龍出鼎湖
 29 徘徊九天上
 30 爾爾長相須
 閭闔 正に嵯峨たり
 雙闕 萬丈餘
 玉樹 道を扶けて生え
 白虎 門樞を夾む
 風を驅りて四海に遊び
 東のかた王母の廬に過る
 俯して五嶽の閒を觀れば
 人生 寄居するがごとし
 潛光して羽翼を養ひ
 進趨 且らく徐徐たり
 見ずや 軒轅氏の
 龍に乗りて鼎湖より出づるを
 徘徊す 九天の上
 爾と長へに相須たん
 遠遊篇
 1 遠遊臨四海
 2 俯仰觀洪波
 3 大魚若曲陵
 4 承浪相經過
 遠遊して四海に臨み
 俯仰して洪波を觀る
 大魚 曲陵のごとく
 浪を承けて相經過す

- 5 靈鼈戴方丈 靈鼈 方丈を戴き
 6 神嶽儼嵯峨 神嶽 儼として嵯峨たり
 7 仙人翔其隅 仙人 其の隅を翔り
 8 玉女戲其阿 玉女 其の阿に戯る
 9 瓊蓋可療飢 瓊蓋 飢を療すべし
 10 仰首吸朝霞 首を仰げて朝霞を吸ふ
 11 崑崙本吾宅 崑崙 本吾が宅にして
 12 中州非我家 中州 我が家に非ず
 13 將歸謁東父 將に歸して東父に謁せんとし
 14 一舉超流沙 一たび舉ぐれば流沙を超ゆ
 15 鼓翼舞時風 翼を鼓して時風に舞ひ
 16 長嘯激清歌 長嘯して清歌を激す
 17 金石固易敝 金石 固より敝れ易し
 18 日月同光華 日月と光華を同じくす
 19 齊年與天地 年を天地と齊しくすれば
 20 萬乘安足多 萬乘 安くんぞ多とするに足らんや
- これらの作品の最後にはいづれも——「服食享遐紀 延壽
 保無疆」(「五遊詠」)、「徘徊九天上 與爾長相須」(「仙人
 篇」)、「齊年與天地 萬乘安足多」(「遠遊篇」)と——延命長

曹植の神仙樂府について(矢田)

壽を祈願した詩句があること、また、「五遊詠」の神仙界における場面の展開が、先に擧げた「長歌行」其二や「飛龍篇」のそれと、其本的に同じであることなど、一見したところ、従來の神仙樂府とそれほど變わるころはないように思われる。

ところが、これらの作品をより詳しく見てみると、現實世界を批判もしくは否定しているかと思われる發言が、どの作品にも含まれているという點に氣がつく。「五遊詠」の「九州不足步」、「仙人篇」の「四海一何局 九州安所如」、「遠遊篇」の「崑崙本吾宅 中州非我家」などがそれである。「五遊詠」「仙人篇」では、現實世界の窮屈さをことさらに強調し、「遠遊篇」では、下界は私の住むところではないと、現實世界をきつぱりと否定している。さらに、ここには擧げなかったが、「遊仙」の起句にも「人生不滿百 歲歲少歡娛」と現實を悲觀する發言が見られる。

これらの詩句は、作品全體の中でいづれも仙界飛行の場面に移る前に置かれ、仙界へ行く直接の動機として描かれている。つまり、窮屈な現實世界から脱出あるいは逃避するため、仙界へ飛び立つ、という構圖をとるのである。

このような發想は、これまでの神仙樂府には全く見られな

かつたものであり、その意味では、神仙樂府における曹植の獨創、と評することができよう。曹植が神仙樂府の中にこのような發想を取り入れたのには、おそらくそれなりの理由があつたと見なければならぬ。

では、これらの詩句に對する先人の見解はいかなるものであつたか、清の陳祚明と朱乾の説を擧げてみよう。

觀「九州不足步」五字、其不得志於今之天下也審矣。無已、其遊仙乎。其源本於靈均。

(陳祚明『采菽堂古詩選』卷六・「五遊詠」)

讀曹植「五遊」「遠遊」篇、悲植以才高見忌、遭遇難厄。灌均之讒、儀隰受誅、安鄉之貶、……所謂「九州不足步」「中州非吾家」、皆其憂患之詞也。

(朱乾『樂府正義』卷十二・「遠遊篇」)

托意仙人、志在養晦待時。意必有聖人如軒轅者、然後出而應之。

(朱乾『樂府正義』卷十二・「仙人篇」)

まず、陳祚明は、「五遊詠」の「九州不足步」の句は、今の天下に志を得ないことを表現したものと解している。そしてさらに、この作品の源は屈原にあることを指摘している。

朱乾もやはり、「五遊詠」と「遠遊篇」の「九州不足步」「中州非我家」のそれぞれの句について、才高きがゆえに妬まれ、艱難辛苦にみまわれた曹植の憂憤の情を、表現したものと解している。また「仙人篇」についても、一時期は身を引いて時の來るのを待つという、曹植の心境を述べたものと解している。

陳祚明・朱乾ともに、これらの作品を曹植の不遇の時期のもの、特に朱乾は「灌均之讒」「儀隰受誅」「安鄉之貶」といった例を擧げているところからみて、文帝期のものと解しているようだ。作品のコンテキストから見た情況證據ではあるが、基本的に妥當な見解と判断されよう。

魏朝における文帝期は、曹植の生涯の中でも、最も忍從を強いられた時期であつた。丁儀・丁廙ら側近の誅殺、監國謁者などによる監視、度重なる封國替え、行く先々での讒言など、さまざまな辛酸を嘗めた時期である。曹植にとってこうした現實世界(「九州」「四海」「中州」)は、まさしく窮屈(「局」)で、息のつまる(「不足步」「安所如」)ものであつた

であろう。

曹植が、現實世界からの脱出といった發想を、神仙樂府の中に取り入れたのは、曹植自身の氣持ちの中に、このような現實から逃がりたいという願望があつたからだ、まずは考えられる。しかし、それだけではなく、曹植が神仙樂府の中にこうした發想を用いた眞の意圖は、自らをこのような劣悪な環境におとしめて、時の爲政者文帝に對して、一種の諷諫の意を表現することにあつたのではないだろうか。この點については、更に次項で検討を加えたい。

(五) 屈原からの影響

現實世界に不滿を抱き、それから逃避するために仙界を目指すといった發想は、實は曹植獨自のものではない。具體的な先行作品としては、屈原の『楚辭』(遠遊)⁽¹⁴⁾の起句からヒントを得たものと思われる。その句とは、以下のようなものである。

悲時俗之迫阨兮

時俗の迫阨を悲しむ

願輕舉而遠遊

願はくは輕舉して遠遊せんことを

曹植の神仙樂府について(矢田)

屈原と「五遊詠」との影響關係については、すでに陳祚明の指摘(前項参照)がみられた。黃節もまた、「五遊詠」「遠遊篇」等の作品が、屈原の影響を強く受けたものであることを指摘している。

子建「遊僊」「五游」「遠游」諸篇、則尤極意模仿屈原者也。

(『曹子建詩註』卷二「遊僊」)

黃節はまた、曹植の「五遊詠」の「九州不足歩」の句は、その發想を屈原の「遠遊」の起句を模範としたものであることを指摘している。

此篇詞意多仿屈原「遠遊」。篇首「九州不足歩 願得凌雲翔」、即「遠遊」起句、「悲時俗之迫阨 願輕舉而遠遊」意。可謂師其意、不師其詞矣。

(『曹子建詩註』卷二「五遊詠」)

屈原は楚の公族であり、常に政治を志向しながら、讒言のために楚王から疎んぜられていた。その志を果たせぬまま、

憂憤のうちに汨羅に身を投じた憂國の士、という人物像を示している。

一方、曹植もまた、魏の皇族として國政に參與して、魏國のために功業を立てることを、第一の志としていた。彼が臨菑侯時代に、側近の楊脩にあてた手紙、「與楊德祖書」¹⁵にいう。

吾雖薄德、位爲藩侯、猶庶幾勳力上國、流惠下民、建永世之業、金石之功。豈徒以翰墨爲勳績、辭賦爲君子哉。

曹植は、辭賦作家として名を成すのではなく、あくまでも政治の世界において、自己の才能を發揮させたいと思つていたのである。その志は終生變わらぬものであった。晩年に明帝に提出した「求自試表」¹⁶に、「志欲自効於明時、立功於聖世」とあることから、そのことは窺えよう。

しかし、文帝曹丕は、即位すると早々に、諸侯をそれぞれの任地國へ封じこめ、諸侯を政治に關與させない方針をとつた。諸侯に對する猜疑心からである。まして曹植は、文帝にとっては帝位の繼承を争つた直接の相手であり、血を分けた

同母弟として、客觀的にも帝位繼承權を分有している。その動向が特に警戒されたのは、政治權力の本質から見れば、當然のことであろう。曹植が魏國のために功業を立て、國に忠誠を盡くしたいと、どのように願ひ出たところで、それがかなえられるはずは、政治のメカニズムとしてなかつたわけである。逆に、曹植が政治を志向すればするほど、文帝の曹植に對する猜疑心・警戒心は、ますます深まることになる。結局のところ、曹植は志を果たす機會を得られぬまま、苦悶のうちに日々の生活を送るしかなかつたわけである。しかも、封國では、監國謁者に監視され、讒言されるなど、皇族とはいへ、軟禁さながらの生活を強いられていた。

屈原と曹植——兩者の境遇には本質的に相通するものがあると言つてよい。この點については、清の丁晏も『曹集詮評』の中で、以下のように指摘している。

王旣不用、自傷同姓見放、與屈子同悲、乃爲「九愁」「九詠」「遠遊」等篇、以擬楚騷。

(魏陳思王年譜・序)

楚騷之遺、風人之旨。托體楚騷、而同姓見疏、其志

同、其怨亦同也。文辭凄咽深婉、何減靈均。

(卷一・九愁賦)

おそらく曹植自身も、屈原と自分との境遇が、極めて類似していることに気がついていたのであろう。曹植が、「五遊詠」「仙人篇」「遠遊篇」等の作品に、屈原の發想を用いるに至った要因の一つとして、こうした境遇の類似性への指摘は不可缺である。

では、曹植はこれらの自作に屈原の發想を用いることによつて、何を訴えようとしていたのであろうか。それはおそらく、丁晏も指摘しているように、國政に與らせてもらえぬ憤懣の情であらう。

曹植は、「植常自憤怨、抱利器而無所施」と『魏志』の本傳に記されているように、自分に有用な才がありながらも、用いてもらえないことに、常に不満を抱いていた。文帝没後の明帝の時代には、曹植はそのような不満を、再三上奏文を提出しては、率直に訴えることもできた。⁽¹⁷⁾ ①魏王朝の政權が相對的に安定した時期であったこと、②明帝曹叡とは帝位を争う關係になかったこと、③叔父として一つ上の輩行(世代)に屬していたこと、などが、それを可能にしたのであろう。

曹植の神仙樂府について(矢田)

しかし文帝に對しては、こうした不満をあからさまに表現することは、曹植がおかれていた状況(①②③の裏がえしとしての状況)から見て、より困難であつたと考えられる。神仙樂府の中に、自分と同じ不満を抱いていた屈原の發想を用いることによつて、暗に文帝への非難、少なくとも不満を寓した可能性は、必ずしも小さくはないと判断されよう。⁽¹⁸⁾ 少なくとも、曹植における神仙樂府への情熱の要因として、骨肉に刻薄な文帝への諷諫の意が托されていたことは、否定しがた[※]いと言わねばならない。

(六) 神仙樂府における安全辨の作用

曹植の「五遊詠」「仙人篇」「遠遊篇」等の神仙樂府が、文帝を諷諫する意圖を含んでいたと考えられることについては、以上に指摘した通りである。しかし、これらの作品が、時の爲政者、つまり絶對的權力者を諷諫する意圖を含む以上、そこには、諷諫者(詩人)と被諷諫者(爲政者)との間に作用する、何らかの表現上の安全辨が必要とされるはずである。[※]

※ 古樂府系の作品では、作者の表現意圖に關する虚實皮膜的な表現手法が、爲政者の體面と詩人の身の安全を保證する一種の

安全辯として作用した。虚實皮膜的表現手法とは、作者の表現意圖を未完結のまま讀者に提示し、比興諷諫の要素が含んでいるか否かは、讀者の主體的・主觀的判斷に任せるといふものである。⁽¹⁹⁾

また、こうした意味での安全辯には、④被諷諫者(爲政者)の體面を保つものとして機能する場合と、③諷諫者(詩人)の身の安全を守るものとして機能する場合とがありうるであろう。そして、曹植の神仙樂府のように作者名を明示した作品において、爲政者を諷諫する場合には、特に③の形での安全辯が機能する必要があるわけである。⁽²¹⁾

こうした觀點から考えた場合、「五遊詠」「仙人篇」「遠遊篇」等の作品については、まず神仙樂府が一般に持つイメージそのものが、有力な安全辯として作用したと考えられる。すでに述べた通り、神仙樂府は、漢魏においては、宴會用の祝頌歌として、習慣的に作られたものであった。そして、その目的は、専ら延命長壽を祈願することにあつた。このような習慣は、當時の貴族の間では、ごく一般的に行なわれていたものであつた。したがって、「神仙樂府」すなわち「宴會用の祝頌歌」といつた基本的なイメージが、彼らの間にす

でに定着していたと見るべきであろう。そのうえ「祝頌歌」と「諷諫性」とは、歌辭の性格上最も結びつきにくいものであつたと言つてよい。曹植は、神仙樂府に定着していたこのようなイメージ、あるいは、神仙樂府の本來的な性格を、逆に自己の身の安全を守る安全辯として利用した。そこに屈原の發想を用いることによって、本来、諷諫性を帯びるはずのない神仙樂府の中に、そうした要素をこめ、時の爲政者文帝に對し、自己の不満を虚實皮膜的に提示していたのではないだろうか。

さらにまた、曹植の神仙樂府には、「飛龍篇」「平陵東」「桂之樹行」等、専ら延命長壽を祈願する作品、あるいは、「升天行」のように、仙界を飛行する様子を描くだけの作品、つまり、從來の神仙樂府とほとんど變わるどころのない作品も、系統的に存在する。曹植が意圖的にそのように實作したか否かは、斷定が困難であるが、諷諫性を含まない一般的な神仙樂府をも系統的に作つているということが、結果的には、「五遊詠」「仙人篇」「遠遊篇」等の諷諫性を帯びた作品の、虚實皮膜的な安全辯としての機能を、いっそう高めていたと考えられるのである。

(七) 結語

漢魏において、神仙樂府は一般に、延命長壽を祈願することを目的とした祝頌歌辭であった。したがって、當然、諷諫の要素は基本的に意圖されていなかったと判断される。

これに對して曹植は、從來の神仙樂府の中に、屈原の「遠遊」の起句にみられる發想を取り入れることによって、神仙樂府にも諷諫的な要素を導入し、このジャンルの表現力を、より複雑なものとした。ここに神仙樂府における曹植の獨個性が認められよう。

時の爲政者に對する諷諫を意圖として作品を作る場合には、自己の身の安全を守る何らかの安全辨が、作品の中に不可缺となる。神仙樂府の場合、祝頌歌辭としての傳統的なイメージが、その直接的な安全辨として作用した。かつまた、曹植の神仙樂府に諷諫性を全く含まないものが并存することが、結果的に安全辨の機能をいっそう高める働きをした。

——「論二賦」「徒詩」等のジャンルにおいて、神仙を信じてないと言言している曹植が、「神仙樂府」の創作には極めて意欲的であつたという一見矛盾した現象は、こうした一連の事實との關係においてこそ、はじめて正當な判断が可能にな

曹植の神仙樂府について (矢田)

るであらう。

〔注〕

本稿で引用した詩については、遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』(中華書局)を底本とした。

(1) 小守郁子「曹植と屈原賦」(『名古屋大學文學部三十年周年記念論集』所收)にも、『楚辭』の曹植に與えた影響についての指摘がある。

(2) 黃節「曹子建詩註」の分類による。

(3) 注(2)に同じ

(4) 曹植の神仙樂府について系統的に考察を加えたものとしては、管見の限りでは、船津富彦「曹植の遊仙詩論」(『東洋文學研究』第十三號)と、陳飛之「應該正確評價曹植的遊仙詩」(『文學評論』一期)とが見られるだけである。船津論文では、主として神仙説話の展開といった觀點から、また、陳論文では、寓喩といった觀點から、それぞれ考察が加えられており、筆者も多く益を受けている。

(5) 『文選』卷四十所收

(6) このような詩は、おそらく宴席で即興的に作られたものであつたと思われる。したがって、現存作品こそ少ないが、當時は頻繁に作られていたものと想像される。また、その詩は多く、神仙樂府の形態をとっていたと考えられる。

(7) 漢代の神仙樂府「董逃行」の最終句にも「陛下長與天相保

「守」とある。また、韻字については、「守」（上聲・有）と「始」（子）（上聲・紙）とは、古くは通韻していたと考えられる。（黄節『漢魏樂府風箋』卷九・参照）

(8) 清・丁晏編『曹集詮評』卷九所收

(9) 清・丁晏編『曹集詮評』卷一所收

(10) この詩の分章法については、『文選』（卷二十四）李善注が、全體を七章に分けて以來、諸本も多くこの分章法によっている。しかし、一方では、蟬聯體や押韻などの關係から、全體を六章に分けるべきとの説もある。ここでは、七章分章説に従った。

(11) 序文に以下のようについて。

黄初四年五月、白馬王・任城王與余俱朝京師、會節氣。到洛陽、任城王薨。至七月、與白馬王還國。後有司以二王歸藩、道路宜異宿止、意毒恨之。蓋以大別在數日、是用自剖、與王辭焉、憤而成篇。

(12) 便宜上、その詩句を擧げておく。

西山一何高	高高殊無極
上有兩仙童	不飲亦不食
與我一丸藥	光耀有五色
服藥四五日	身體生羽翼
輕舉乘浮雲	倏忽行萬億
流覽觀四海	茫茫非所識

これらの句は、曹丕の神仙思想に對する批判の對象とし

て、提示されたものであり、その意味では、神仙樂府の最も一般的な形態をなしていると言えよう。

(13) 注(12)に擧げた曹丕の「折楊柳行」の前半十二句との類似は、いっそう顯著である。

(14) 『楚辭』遠遊の作者については、王逸は屈原の作としているが、最近では漢代の擬作であるとの説が有力である。しかし、曹植の時代では、『楚辭』は王逸の章句で讀まれていたとみるのが、最も妥當な解釋であろう。したがって、曹植もまた、「遠遊」を屈原の作として認識していたと考えてよいであろう。

(15) 清・丁晏編『曹集詮評』卷八所收。この作品は、建安二十一年（二一六年）から二十四年（二二〇年）の間に作られたもの、すなわち、曹植二十五歳から二十八歳の間作と考えられる。その根據は、以下の通りである。

①本文中に「僕少小好爲文章、迄至於今、二十有五年矣」という記述が見られること。

②手紙の受取人である楊脩（字は德祖）が、建安二十四年に曹操によって誅殺されていること。

(16) 清・丁晏編『曹集詮評』卷七所收。太和二年（二二八年）、曹植三十七歳の作。

(17) 文帝が没し、甥の明帝が即位すると、曹植は再三上奏文を提出しては、明帝に自分の意見を率直に訴えるようになる。が、いずれの上奏文にも、その根底には、自分が政治に與ら

せてもらえないことへの不満がみられる。その部分を例舉しておく。

臣聞驥驥長鳴、則伯樂照其能、盧狗悲號、則韓國知其才。……今臣志狗馬之微功、竊自惟度、終無伯樂、韓國之舉、是

以於邑而竊自痛者也

臣伏自惟省、無錐刀之用。及觀陛下之所拔授、若以臣爲異姓、竊自料度、不後於朝士矣。

(「求自試表」)

苟吉專其位、凶離其患者、異姓之臣也。欲國之安、祈家之貴、存共其榮、沒同其禍者、公族之臣。今反公族疏而異姓親、臣竊惑焉。

(「陳審舉表」)

臣才不見效用、常慨然執斯志焉。

(「諫取諸國士息表」)

尚、これらの「表」はいずれも清・丁晏編『曹集詮評』巻七所收。

(18) この點に關して、鄭孟彤・黃志輝「試論曹植和他的詩歌」(『文學遺產增刊』第五輯)にも、以下のような指摘がある。

他既然明知「神仙」是虛偽的；而他還是這樣做，正說明了他對仙境的憧憬，實際上是一種無可奈何的安慰，是一種惡劣的環境壓迫下的煩悶的呼聲；而這呼聲里顯示出曹植當時處境的困苦、險惡，也顯示出曹丕、曹叅對自己骨肉的殘酷、

曹植の神仙樂府について(矢田)

害。

(19) 松浦友久『中國詩歌原論』(八・「詩と音樂」)(樂府の表現機能)

(20) 漢代の樂府古辭の中にも、爲政者を諷諫していると思われる作品が存在する。しかし、漢代の樂府古辭は、多く朝廷内で演奏するために採集されたものであることから、皇帝の目に觸れるまでに、樂府官によって、歌辭にある程度の修正が加えられたと想定できよう。その場合の安全辨は、主として爲政者の體面を保つものとして機能するわけである。

(21) 諷諫性を帯びた作品を、多數創作している署名作家——という點から考へた場合、曹植は、明らかに、その最も早い時期の作家である。この點から見れば、曹植がこのような意味での安全辨を、いち早く作品の中に取り入れた作家であったことは、樂府詩史として、一つの必然だと言つてよい。